

■ 2005 年 1 月刊 ■



イングランド住宅史

本書は、イングランド住宅の歴史を、構造・意匠・機能論といった日本の「建築学」をベースとした総合的な視点から、図版・写真を網羅して通史として全体像を提示したものである。

大橋 竜太 著

中央公論美術出版

刊行のことば

イングランドの住宅建築に関しては、これまで日本でも、さまざまなかたちで紹介されてきた。たとえば、中世のハーフ・ティンバー建築、カントリー・ハウス、スクエア、アーツ・アンド・クラフツ運動、労働者住宅、ハウードの「田園都市論」、ニュータウン政策、登録建造物制度等は、すべてイングランド住宅史に関連することであり、建築学に限っても、建築史、建築意匠、建築計画、都市計画、住宅問題、文化財行政等といった分野で、さまざまな目的や文脈のなかで論じられてきた。しかし、これらを総合的に取り扱ったものはなく、それぞれの関係に関しては、必ずしも明快になっていないと言えない。

本書は、これら断片的に紹介されてきたイングランド住宅に関連する事柄を、社会の変化や建築史との関連の中で通史として全体像を提示したものである。これにより、イングランド住宅の理解が一段と深まるものと期待している。イギリスの研究者とは異なる日本の研究者の視点で書くことによって、翻訳本等では得られない、新たな見解を示した。また、本書では、写真、図面等多用しており、そのなかには、著者が現地調査で収集した貴重な情報も多数あり、イングランド住宅建築に関する資料としても重要なものである。

〔組見本〕

第四章 封建社会と住宅 — 中世 (1066 ~ 1485 年) —



4-62 オールド・フライアリー
(オウスアリー、ケント州、
15世紀)

と背面の壁がホールの壁と同一面にあるが、二階では壁が張り出しすなわち、ジェティしている。また、ホールの高さ二階建のウイングの高さは等しく、ひとつがりの寄棟屋根が架けられ、屋根スパンはウイングの幅で、ウイングがジェティした分だけホールのスパンより長くなり、ホールの前面の軒はフラットで支えられる。といった特徴をもつ本造住宅の形式である。平面は他の住宅と変わりなく、ホールの前面での後退が決定的な特徴となる。また、ウイールドン・ハウスとは、ある特定の社会的地位の人物の住宅のことではなく、建築形態の類型を指すものである。(S・R・ジョーンズとJ・T・スミスによる)

このような形態の民家が、ウイールドン地方を中心にイングランド南東部には現在も多数、残っている。その正確な数は明らかにないが、ケント地方だけでも三五〇棟が確認されている。

4-63 ヤードハースト (グレイ・チャート、
ケント州、1450-75年頃)

目次

第一章 イングランド住宅を概観する前に

- (一) イングランドの風土と統治制度
- (二) 住宅の種類

第二章 ブリトン人の文化とローマ人が残したもの

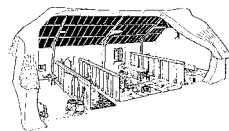
- (一) シェルターとしての住居
- (二) ローマ人の住宅

第三章 国家形成と人々の暮らし

- (一) ローマ軍撤退後のイングランド
- (二) 支配者階級の住宅
- (三) 発掘調査で明らかになった民家

第四章 封建社会と住宅

- (一) ノルマン・コンクエストとその直後の住宅
- (二) ホールを中心とした住宅平面の成立と展開
- (三) ホール・ハウスの普及
- (四) 中世の住宅平面と社会背景



第五章 カントリー・ハウスの勃興

- (一) チューダー王朝の王宮
- (二) カントリー・ハウス
- (三) タウン・ハウス
- (四) 民家の改革とその展開



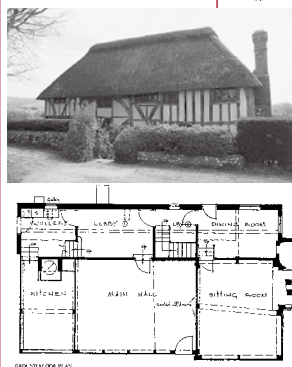
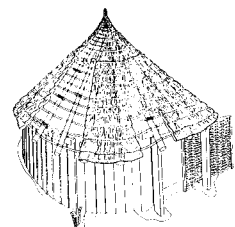
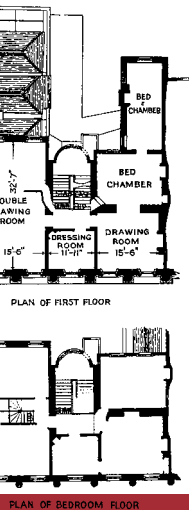
第六章 ルネッサンスとバロック

- (一) スチュアート朝の専制政治と二つの革命
- (二) ジャコビアン建築
- (三) バロック建築
- (四) ロンドン大火とその影響
- (五) レンガ造建築の流布



第七章 新古典主義

- (一) 近代への胎動
- (二) ジョージアン建築
- (三) スクエアの建設とテラス・ハウス
- (四) ピクチャレスク



画期的なイギリス住宅史

桐敷真次郎（東京都立大学名誉教授・工学博士）

最近の統計によると、日本の住宅の寿命がわずか三〇年という驚くべき状況に陥っているのに対し、イギリスの住宅は一四一年、アメリカは一〇三年、フランスは八九年、ドイツでは七九年の平均寿命を保っていると報告されている。地震がない、台風やハリケーンも来ないという恵まれた風土にあるとはいえ、イギリス住宅の希有の耐久力と融通性を的確に示した数字である。四〇年近くも昔の話になるが、私がロンドンで下宿していた家はたぶん一八四〇年代に建てられたテラス・ハウスで、当時すでに寿齢一一〇年を越えており、一六〇年にもなる現在も依然として健在である。二〇〇年、三〇〇年の住宅はざらで、城郭なら一二世紀、町屋でも一二世紀のものが現存している国だから、格別驚くにはあたらない。

「家はわが城」というのがイギリス人の伝統的モットーで、彼らは強固な住宅を好み、自分の住まいに絶大な愛着を抱き、よく手入れをし入念に飾り付ける。さらに、イギリスには「家屋荒廃の罪」という法律があり、住宅を適切な状態に維持できない市民は自宅を手放して賃貸住宅に移らなければならない。さらに貸家でも、外壁は三年ごと、内壁は七年ごとに手入れをするという契約条項が入っていたりする。建物が長持ちするのは偶然ではない。

不思議なことに、そんなイギリスでも、古民家の写真集や住宅のパタン・ブックは無数といつてよいほど刊行されているのに、古代から現代までのイギリス住宅を系統的に検討した住宅通史はいまだに書かれていない。他方、明治・大正時代にイギリスをひとつのモデル国とみなしてきた日本では、イギリス住宅から学ぶべきことが多大にあったはずにもかかわらず、これまでイギリス住宅史が系統的に研究されたことがなかった。

そういうわけで、大橋竜太の『イングランド住宅史』は文字通り画期的な著作である。上記のような住宅史の条件を満たしているだけではなく、地理的・政治的・社会的背景も適切に説明され、イギリス史を学びながら住居の変遷をたどることができる。また、住宅は多種多様な建築群の一部であって、住宅のデザインが教会堂その他の建築から支配的な影響を受ける時代もあるが、そうした時代についてはより大規模な建築の動向について簡潔に説明されている。

本書によってイギリスの住宅が果たしてきた歴史的業績についての理解が画期的に深められることはまず疑いない。さらに、本書のもたらす刺激によって、同じように優れた伝統をもつ日本の住宅についてのより根元的な考察が進められ、いまや混沌状態に陥っている現代日本住宅により深い思想に裏付けされた新しい指針と方法が出現することを望んでやまない。

第八章

ヴィクトリアン建築の栄華
(一) ヴィクトリア王朝
(二) 一九世紀の古典主義リヴァイヴァル
(三) ゴシック・リヴァイヴァル
(四) 鉄とガラスの建築
(五) ヴィクトリア王朝期のカントリー・ハウス

第九章

近代社会の成立と住宅建築
(一) 産業革命の弊害
(二) ヴァナキュラー・リヴァイヴァル
(三) アーツ・アンド・クラフツ
(四) エドワードリアン・クラシシズム
(五) 都市問題と住宅改良運動
(六) 近代都市と住宅地の形成

第一〇章

英国の苦悩と住宅・都市政策
(一) 世界のなかの英国と国内情勢
(二) 住宅・都市問題
(三) モダニズム建築
(四) 近代住宅

第十一章

英国の再生
(一) 英国の改革
(二) 政府主導の都市再生
(三) 現代の建築界と住宅建築事情
(四) リジェネレーション

第十二章

伝統の継承
(一) イングランド住宅の伝統
(二) 未来へ向けて



年表

図版出典

参考文献

索引

地図

本書の特色

* 原始時代の住居から現代建築にいたるまで、イングランドにおける、すべての時代の住宅建築に関して言及。所有者の階層に関しても、幅広く取り扱っている。

* 政治・社会史、建築史の広い視野からイングランドの住宅建築を総合的に叙述。

* 写真・図面等の図版を多数掲載。年表・参考文献等の資料も充実。



書名 イングランド住宅史

著者 大橋 竜太 (おおはし りゅうた)

著者略歴

サイズ B5 判

ページ数 700 頁

図版 581 点

体裁 上製本・函入り

定価 38,850 円(本体 37,000 円+税)

ISBN4-8055-0480-3 C3052

1964 年 福島県生まれ
1988 年 東京都立大学工学部建築工学科卒業
1990 年 同大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
1995 年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了・博士(工学)
ロンドン大学コートールド美術史研究所に学ぶ(1992-94 年)
1995 年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻・助手
1997 年 東京家政学院大学家政学部住居学科・講師
2004 年 同助教授
著書 西洋建築史研究会編『パラレルー建築史・西東』(共著、本の友社、2003 年)
訳書 スティーヴン・キャロウェー編『様式の要素』(共訳、同朋舎出版、1994 年)など

【 関 連 書 籍 】

新しい住居 つくり手としての女性

ブルーノ・タウト 著

斉藤 理 訳

B5 変形カバー装

本文 104 頁

定価 2,625 円(本体 2,500 円+税)

ISBN4-8055-0473-0

第二次世界大戦前に来日し、日本の建築界に多大な影響を与えた建築家ブルーノ・タウトによって著された本書は、女性を対象として建築的視点から煩雑な家事作業をいかに軽減できるかを説く。建築家タウトの住宅論を理解する「概説編」として刊行。

一住宅

ブルーノ・タウト 著

斉藤 理 訳

B5 判変形カバー装

本文 138 頁 カラー口絵 8 頁

定価 3,675 円(本体 3,500 円+税)

ISBN4-8055-0474-9

ブルーノ・タウトがベルリン郊外に計画した自邸の設計プロセスを始めから終わりまで事細かに解説した本書は、建築家タウトの住宅論の「実践編」として読み解くことができる。原書にはない彩色図版を参考として付し、本邦初訳で刊行。

建築へ

ル・コルビュジェ・ソーニエ 著

樋口 清 訳

B5 変形カバー装

本文 244 頁 挿図 194 点

定価 5,250 円(本体 5,000 円+税)

ISBN4-8055-0442-0

本書の邦訳は過去、2 冊刊行されたが、そのいずれもがル・コルビュジェ自身がコラージュしたレイアウトとは程遠い。このたびル・コルビュジェ財団の全面的協力を得て、ほぼオリジナル原本と同じ判型・レイアウト・装丁で流麗な新訳とともに、ル・コルビュジェのエスプリ・センスのままに刊行。

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋 2-8-7

電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取扱いは